



清里高原ライフスタイル・アカデミー 開拓文化が育む新たな暮らしの風景

清里高原は、山梨県八ヶ岳南麓に位置する酪農や観光で知られる地域である。同地は元来気候の厳しい荒野であり、戦後本格的に開拓された。観光地としての歴史は浅く、1970年代に急成長した地域である。1980年代には多くの観光客が清里を訪れ、それに合わせて装飾的な宿泊施設や飲食店が乱立したが、短期間での開発は清里本来の魅力を衰退させる結果に終わった。現在、清里を訪れる観光客は減少し、80年代に建てられた施設は特徴的な形態を残したまま、廃墟となっているものも少なくない。一方で、開拓の歴史や建築は、清里の象徴的な文化として現在も地域に根付いている。こうした風土のもと、近年清里に新たな生活スタイルが現れ始めている。都内と清里のどちらにも生活拠点をもつ「半住民」といえる人々の生活スタイルである。彼らは地域住民との交流を通し、高原の趣味豊かな暮らしを楽しみながら学ぶことで、多様な生活を実践している。こうした文脈と風土のもと、本計画では、清里発展の歴史を考察すると共に、清里への移住希望者が高原暮らしを実際の生活を通して体験する貸別荘地域を提案する。

清里の開拓文化



現在は観光スポットとなっている清里家（1957年再建）

清里は、小阿部ダム建設のために住まいを追われた人々によって1936年に開拓された。標高が1000m以上もある高冷地のため、作物の育たない厳しい環境であった。戦後、アメリカ人のGHQ特権モデルによって、高冷地における農村モデルとして開拓された。乳用牛を伴う酪農中心の農業が始まった。その際、アメリカの伝統的なコニアル様式を参考にした建築が多く建てられた。それらの建築により、欧米の建築様式から成る独特な農村風景が形成されたことから、清里は後に観光地として大きく発展することになる。

観光地としての発展



あいの原地区の多様な建築様式

70年代に入り、欧米風の風景に憧れた人々が徐々に清里に移住し始める。彼らはペンションという欧米風の小規模な宿泊施設を営み、趣味豊かな生活を送った。戦前に開拓されたあいの原地区には、次第にペンションが群集するようになる。しかし、それぞれの建築様式は統一されておらず、そのことによる景観破壊が懸念された。その事に對し、あいの原地区は樹木の統一などによって、景観を保護する工夫を行う。80年代になると、戦後開拓された土地にもペンションが建つようになり、やがてペンションが雑居などで取り上げられ、清里は観光地として大きく発展する。雑居などで清里の町並みを指し「メルヘン」という言葉が使われるようになると、駅前周辺には清里の文脈とは無関係と思われる装飾過多な建築が建ち並ぶようになり、清里本来の風景は次第に失われていった。

新たな住民像



半住民の暮らし（参考）「ハナダイズ」 2013年5月号 第2期

開拓の歴史や建築は、清里の象徴的な文化として現在も地域に根付いている。こうした地域のもと、近年清里に新たな生活スタイルが現れ始めている。定年を迎えた人々が、都内で多少の仕事を続けながら、週末や週半分の清里で過ごし、こちらでも趣味程度の仕事をする「半住民」といえる人々の生活スタイルである。彼らは地域住民との交流を通し、高原の趣味豊かな暮らしを楽しみながら学ぶことで、多様な生活を実践している。また、そのまま移住する人もいるため、地域の活性化にも繋がっているといえる。

清里の文脈



■ 敷地の抽出

敷地は、清里朝日丘地区にある国道付近の牧草場を想定する。朝日ヶ丘地区は、80年代に観光地として大きく発展した地域で、元は戦後開拓された酪農地帯である。高齢になった牧場主が牧場を売却した後、観光地として発展した。牧場主が大きな面積で購入する人にのみ土地を売却した結果、建築同士の距離が保たれ、高原の広がりある景観が守られている。また近年、朝日ヶ丘地区では県外の高齢者による別荘の購入が増加しつつある。こうした状況のもと、別荘主が庭づくりや畑づくりを地域住民から学ぶという良好な交流がみられる。



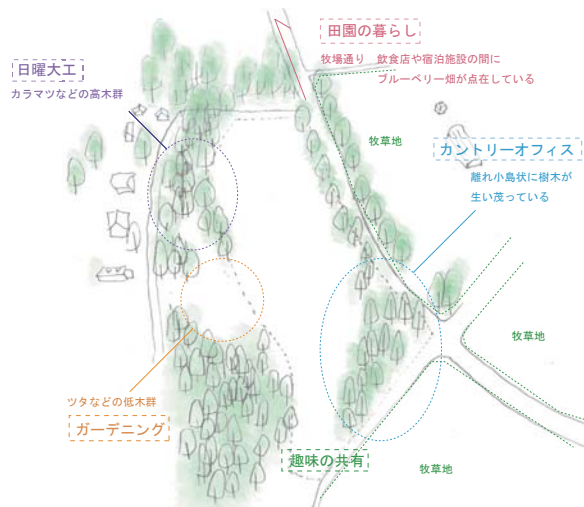
北側の道路より敷地を見る。牧柵や東側道路沿いに植えられたユリの木によって高原の広がりある景観が守られている。



東側より敷地を見る。敷地西側には様々な種類の樹木が分布している。

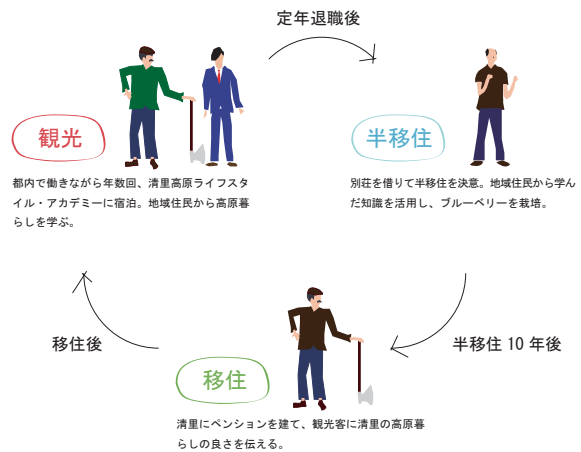


■ 5つのライフスタイル



想定する敷地内には元の牧場主が植えた様々な種類の樹木が分布している。ここでは、住棟が配置される場から生活のイメージを想定し、それを基に5種類の異なったライフスタイルを実践可能な貸別荘を設計する。

■ 移住のサイクルを考える

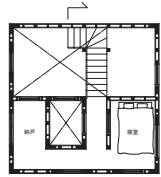


移住者が観光・半移住・移住と段階を踏んで移住できる貸別荘とする事で、高原での生活の予備練習をしながら移住する事が可能となる。それにより、将来的な移住者の増加に繋がる。



ブルーベリーハウス

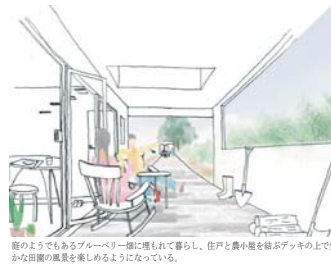
清里には、仕事ではなく、趣味として作物を育てる人が少なくない。この住棟は、そのような趣味の農業として清里の特産でもあるブルーベリーを育てながら暮らすライフスタイルである。



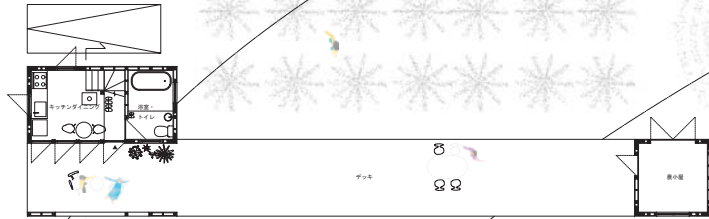
2 階平面図 S=1/100



断面図 S=1/100



ライフスタイルイメージ 【田圃の暮らし】

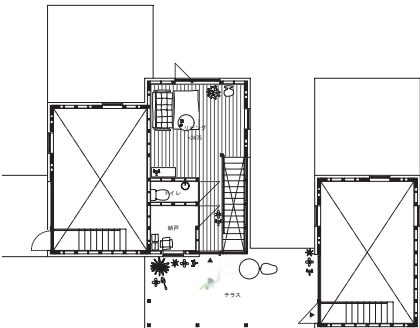


配置図表 1 階平面図 S=1/100

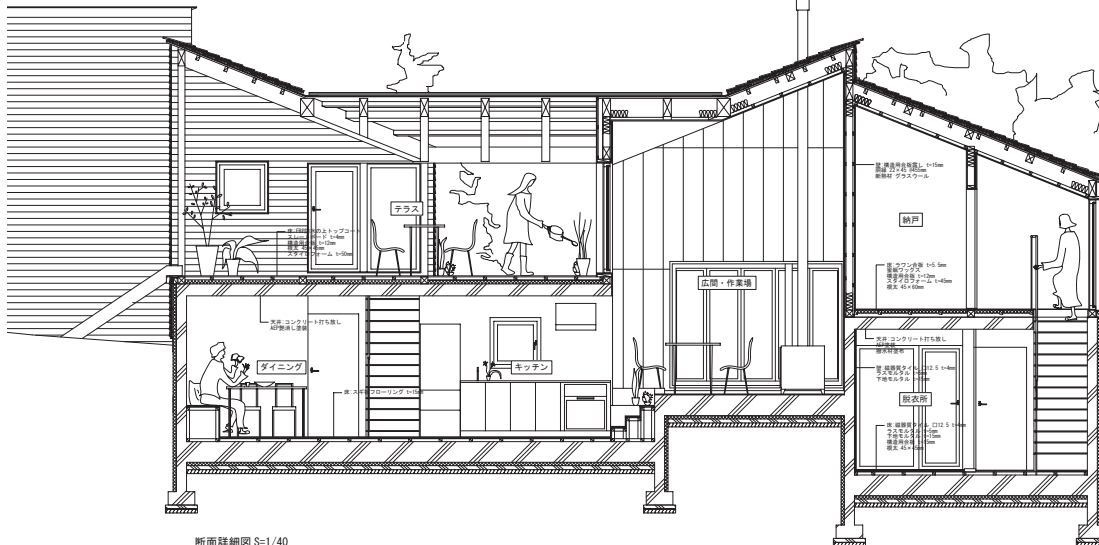
ガーデンハウス

この貸別荘は道路に面した庭／中庭／サンルームなどの様々な庭で、四季折々の植物を、一年を通して楽しむライフスタイルである。

ライフスタイルイメージ 【ガーデニング】



2 階平面図 S=1/100

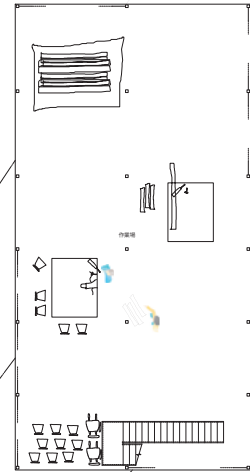
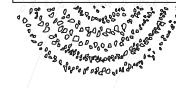


断面詳細図 S=1/40

DIYハウス

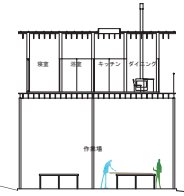


ライフスタイルイメージ 【DIY】

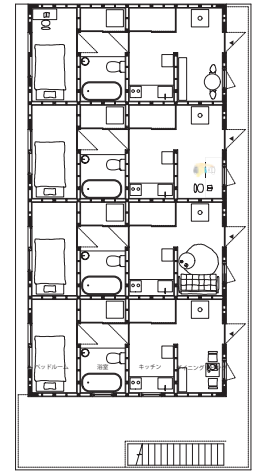


配置図表 1 階平面図 S=1/100

この住棟のライフスタイルイメージは日曜大工である。また、移住スタイルは単身者の週末移住を想定している。主な構成は、1階のビロティが広い作業場となっており、周辺の樹高10～15mの高木に合わせて住戸を2階に配置している。

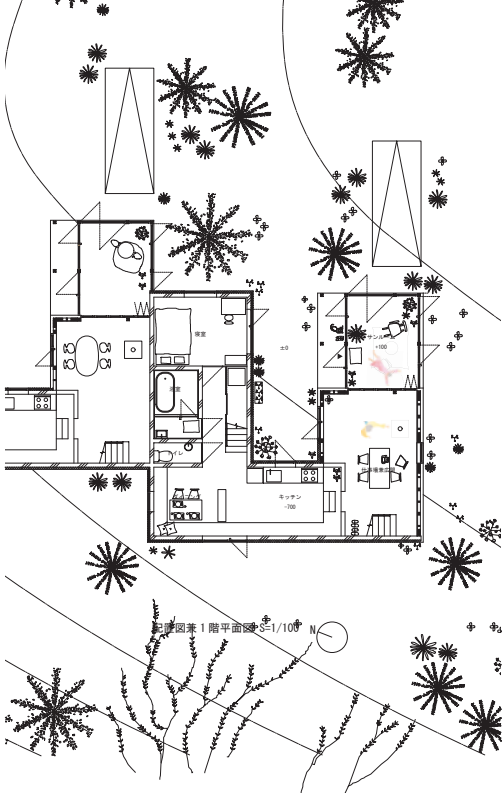


断面図 S=1/150



2 階平面図 S=1/100

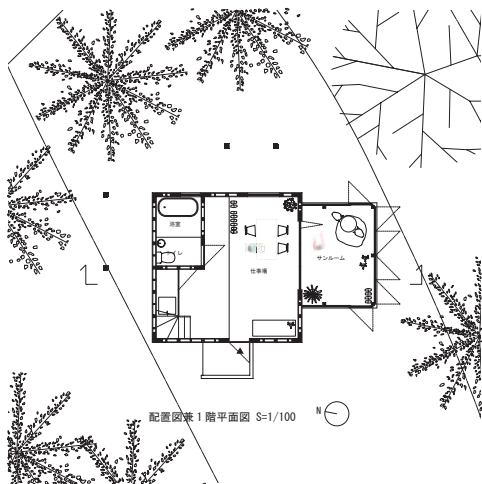
寝室・キッチン・ダイニング・水回りのレベルを凍結深度以下まで下げる事で、2階のレベルがGLに近くなり、2階テラスにも玄関をもてるようになる。これにより、積雪時の住戸へのアプローチを確保すると共に、1階のボリュームを低くし、建物裏手の自然と各庭を、テラスを介して連続させている。



■ バードハウス

この住棟は、自宅で仕事をしながら暮らす住まいである。周辺の様々な樹木に囲まれた静かな環境で仕事をし、仕事が終われば木々にとまる野鳥を観察しながらのんびりと過ごす。住まいと仕事場が清里の環境で一体となることで、ゆとりある生活をおくることができる。

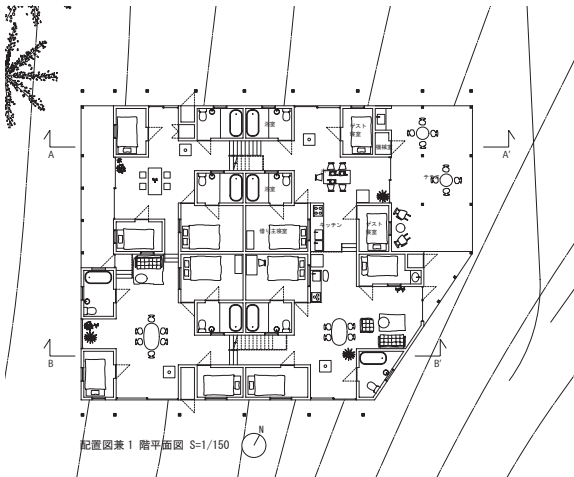
ライフスタイルイメージ 【カントリーオフィス】



■ パーンロッジ

清里には様々な趣味をもつ人々が集まる。そんな人々が、短期間共に暮らすロッジを設計する。料理家のシェア、愛犬家のシェア、音楽家シェアや美術家のシェアなどの趣味を共有するためのホールを持つそれぞれのシェア貸別荘が高低差によってゆるやかに分節されながらもつながる。様々な趣味が相互に関係し合う事で、多様な広がりをもてる住まいとなる。

ライフスタイルイメージ 【趣味の共有】



A-A' 断面図 S=1/150



B-B' 断面図 S=1/150

■ ファイアーウッド・センター

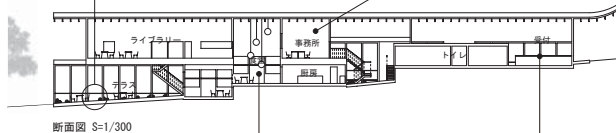
この施設は、入居の受付、不動産の紹介、生活の援助を行う。さらに、地域住民も利用する。工房、食堂、ライブラリーなどが入っている。



薪小屋のコミュニティ 寒さの厳しい清里では薪は重要な資源である。現在の清里では山を持つ地主などが薪を加工し、地域住民に受け渡している。本計画ではそれぞれの貸別荘を、地域住民も利用する薪小屋のコミュニティ施設でつなぐ。



事務所 施設の運営管理をやる他、貸別荘の分譲や不動産の仲介業務を行う。



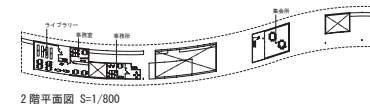
断面図 S=1/300



食堂は地域住民と知り合うきっかけになる。

ロビー・受付

入居者はこちらで受付を済ませ、各住戸へ向かう。



2階平面図 S=1/800



配置図兼1階平面図 S=1/800



ここを利用する地域の景観委員会から様々な技術が学べる。



朝日が丘地区景観委員会による牧場制作